

広島文教女大短大 ○内藤 昭子
岡田ハナコ

1. 本研究はわが広島県が全国生産額の95%を占める手縫針について、針の実態把握に当たりその使用状況調査を基として行なった錆の研究、形状と運針の關係に引きつづくものであって、運針における縫角度の考察と共に能率的な針の検討を試みたものである。

2. 試料は形の上で差の見られる4の2の針5種に加えてハイカーボン針をも入れ、用布としてはキュプラ100%薄ピンク色の材質に、縫合せおよび糸通し実験用として絹100%の糸を用い短大生を被験者としては運針検討を、また小中高校の児童生徒および短大生を対象としては針めどの通過実験を行ない、また、それぞれの縫角度における荷重の測定をも試みた。

3. ゲージおよび長さを等しくする同規格の針でもメーカーにより形状において差があり、針みぞは個々のちがいが大きいものである。針の形状が縫角度における荷重の大小にかかわらず縫合せの条件を、また胴や腰の状態針先の形が用布としての材質組織への縫合せの難易を左右するものである。かつ、針みぞにおいては長みぞより丸みぞの方が糸の通過過程においてもみぞずれによる糸の劣化においてもまさっているものであることを認めることができた。